

平成25年度 第1回食の循環によるまちづくり推進委員会 議事録

日 時：平成25年6月19日(水) 午前10時00分～正午

会 場：新発田商工会議所 4階 大会議室

出席者：21名

| | |
|------|---|
| 出席委員 | 下條荘市委員長、佐藤ミネ副委員長、中村光昭委員、阿部慎委員、川瀬孝男委員、高山廣伸委員、成澤強委員、肥田野直子委員、引原美穂委員、宮尾俊輔委員、宮野久美子委員、小野伸子委員、佐藤恭子委員、吉川治男委員、宮島隆行委員、高橋賢司委員、菅一義委員、渋谷知明委員、津村賢委員、山口恵子委員、関根暁子委員 |
| 事務局 | 杉本企画政策課長 野崎課長補佐 食の循環によるまちづくり係(中山係長、土田主事、大淵主事) |

(欠席委員)

石井寛史委員、斉藤幸子委員、広岡信行委員、三田村秀之委員、藤田健委員、西鉄幹委員、木戸寿明委員、南日厚子委員、金田一努委員、目黒武志委員、小竹英之委員、川本健太郎委員、小林豊男委員、赤塚昌子委員、星野龍一委員、山崎葉子委員

1 開会

2 あいさつ

【事務局】

おはようございます。4月から食の循環によるまちづくりの主管課長となった杉本と申します。日頃より食の循環によるまちづくりの推進に多大なるお力添えをいただきありがとうございます。

市まちづくり総合計画では、食の循環によるまちづくりを重点的取組として位置付けて推進を図っています。これまで、食の循環しばたリレートークの開催、しばた食の循環大使交流イベントなど食の循環のまち新発田を浸透させていくにあたり、推進委員会の皆様のお力をいただき進めていくことができました。継続は力なりで、県内外から行政視察等もあり、国を含め新発田市は非常に注目を集め、高い評価を得ています。これも皆様のお力添えの賜物です。

新発田市食の循環によるまちづくり推進計画では、計画期間を21年度から27年度に定めています。昨年度、計画期間の折り返しを迎え、過去3か年の成果を振り返りましたが、産業振興等は道半ばであると認識しています。より一層実践的な取組を重視し、市民の皆様に見える形で食の循環によるまちづくりを推進したいと思います。そのためには、これまで以上に進行管理、庁内連携が必要とのことから、教育委員会から市長部局の企画

政策課に係を設置し進めていきます。

委員の任期は2年間で、折り返しを迎えました。下條委員長をはじめ、委員の皆様にはこれからも変わらぬお力添えをいただきたいと思います。以上、あいさつとさせていただきます。

【委員長】

おはようございます。食の循環によるまちづくり推進委員の任期が2期目の折り返しを迎えた。これまでの3年間、様々な経験をしてきたが、取組についてはマンネリ化したものや、新たに取り組まなければならないものもあるが、それについて本日は委員各位の意見を聞きたい。また、委員全員が頻繁に集まり会議を開くのは困難であるということもあり、本日は意見を出し合って、今年度の方向性をしっかり決めたいと思うので、よろしくお願ひしたい。

(以降、事務局より委員及び事務局紹介)

3 報告事項

(1)「食の循環によるまちづくり」取組状況等について

【委員長】

報告事項、食の循環によるまちづくりの取組状況について、事務局に説明願う。

【事務局】

平成21年度から27年度までの計画期間の折り返しを迎えたこともあり、昨年度、進捗状況の整理をしたところです。今回、報告をする意図として、現状を委員の皆様と共有することで各事業者、各団体の皆様と市が連携を図りながら今後も食の循環によるまちづくりの取組をしていただきたいという思いから、報告をします。

<資料1(頁1)>

そもそも、なぜ食の循環によるまちづくりに重点を置いているのかについて、主な理由を挙げます。まず、農業が盛んであり、地域資源が豊富であること。そして、加治川の清流などの美しい自然、昔からの伝統文化や郷土料理、さらに市内3か所に有機資源センターがあり、堆肥生産を行う環境があること。加えて、当市は10万人都市であり、取組が進めやすい規模であり、委員の皆様との連携がしやすいこともあり、食の循環によるまちづくりを推進しています。

これまでのあゆみですが、取組を開始した平成17年7月から約3年半の間、市民の皆様と共に知恵を出し合い、平成20年12月に食の循環によるまちづくり条例を制定しました。福井県小浜市を手本にしておりますが、全国的に見ても食関連の条例を制定しているところは多くはありません。今後、市が進めていくまちづくりの基盤となるということ

からも、条例制定の意義は非常に大きく、条例には計画を定める旨の条項があり、これに基づき、新発田市食の循環によるまちづくり推進計画を策定しました。

市まちづくり総合計画基本構想では、平成24年度から31年度まで食の循環によるまちづくりを重点的取組に位置付けています。

食の循環しばたリレートークは現在も開催を続けています。めざせ100彩健康づくり推進実行委員会も主催しております。

<資料1(頁2)>

また、講演をきっかけに著名な方にしばた食の循環応援団として活動していただいています。しばた食の循環応援団は平成22年度から制度運用を開始しました。現在までの3年間で、平野レミ氏や服部幸應氏など、著名な14名の方が応援団に加入してくださいました。6月22日に広島県で食育全国大会が開催されます。そこでは、服部幸應氏をコーディネーターとして全国各地の食、食育に関する事例発表が行われますが、当市食の循環によるまちづくりのアドバイザーでもある新潟県立大学の村山伸子教授をパネラーとして、当市食の循環によるまちづくりの取組内容についてお話していただけると伺っています。加えて、しばた食の循環応援団の加藤秀雄氏も、パネラーとして当市の取組についてお話をされると伺っています。継続は力なり、全国各地でこうした応援団同士の繋がりが生まれ、当市をテーマにお話をしていただく機会もあります。

<資料1(頁3)>

食の循環によるまちづくりにご協力していただいている推進委員会委員の皆様のご活動をご紹介します。環境問題をテーマに活動されているNPO法人ユー&ミーの会の皆様には、食に対する感謝の心を育む「食育」においてもお力添えをいただいています。ゴーヤレシピコンテストの入賞作品のレシピが、敬和学園大学が運営する「まちカフェ・りんく」のメニューになると先週の広報しばたにも掲載されていました。しばた食の循環応援団と同様、推進委員の皆様のご活動にも繋がりが生まれています。NPO法人ユー&ミーの会の皆様は、新潟県環境賞など、各種賞を受賞されています。

副委員長が会長を務める食生活改善推進委員協議会の皆様には、主に食の循環における「調理」「食事」の過程でお力添えをいただいています。年間を通じて約110回の地区別栄養講習会をはじめ、各種教室を開催していただき、食と健康についての指導や、郷土料理の調理法なども伝えています。

食の循環によるまちづくりを体現できるモデル地区である米倉でも活発に取組がなされています。都市と農村の交流だけでなく、有機資源センター、交流施設、直売所すべてが米倉にあり、同地区内において食の循環の全過程を体験することが可能です。しばた旬の会企業組合が、月に1度、米倉の交流センターで郷土料理をテーマにランチを提供しており、そのつながりから、JAの広報誌において新発田市の郷土料理が紹介されています。

敬和学園大学が運営している新発田駅前の「まちカフェ・りんく」では、敬和学園大学が営業していない日を利用し、新発田農業高校が「芝農カフェ」を実施しています。学生

が頑張っているため反響が大きく、市民の皆様の応援もあり、品物があっという間に完売しました。市として芽を出し始めた活動の背中を押していきたいと思います。

<資料1(頁4)>

新発田市食の循環によるまちづくり推進計画では、策定時から118の事業を計画立て、現在進捗管理をしています。例えば数値が上昇しているか、または維持しているか、という視点で過去3か年を振り返ったのですが、特に成果が上がっているものを、3月15日号の広報しばたで3つ挙げたところです。

1つ目は、食とみどりの新発田っ子プランです。NPO法人ユー&ミーの会や、食生活改善推進委員会、教育現場の皆様力を借りながら、子ども達に食への感謝の心、知識、実践力をつけ、ひいては生きる力、豊かな心を育むという目的で活動しており、子ども達には顕著な変化が表れています。継続は力なり、各学年それぞれがテーマを持って取り組んでおりますが、課題は保護者にはそれほど変化が表れていないことです。このことから、推進委員会の活動におけるターゲットとしては、子育て世代も候補の1つだと考えています。

2つ目は、生ごみの堆肥化です。推進地区が市内に11地区あり、家庭生ごみ分別回収をしています。その結果として、燃えるごみの量が年々減少しています。一方、生ごみが有機資源センターに搬入される量は、年々増加しています。地域における取組は現11地区が中心ですが、小中学校においては全34校のうち順調に実施校が増えており、給食残さをNPO法人ユー&ミーの会の皆様に回収してもらい、堆肥センターへ搬入してもらっています。一方で、11地区以外では、各家庭での生ごみ発生抑制と残さ処理の取組として、買い過ぎない、作り過ぎない、無駄にしないを呼び掛けていく必要を感じています。

3つ目は、食の循環しばたモットイナイ運動です。推進委員会の発案を受け、市内300強ある飲食店のうち約3分の1にあたる102店舗に協力をいただいています。協力店に対し23年度に掲示物や呼びかけにより食べ残しが減ったかどうかについてアンケート調査をしており、回答数は少なかったものの、「減った」と「少し減った」を合わせると過半数を超える結果が得られました。今後も呼びかけを行っていききたいと思います。課題として、各家庭においてモットイナイの意識が啓発されるような呼びかけを行っていく必要性があります。

また、田中優子氏、坂東眞理子氏をはじめ、応援団の皆様から当市の取組に高い評価と応援をいただいています。今後のさらなる進化の鍵は、より地産地消、地消地産に基づいた取組の推進や、各家庭の子育て世代をターゲットに周知・啓発を図っていくことと捉えています。

<資料1(頁5)>

食の循環の各過程別にみた場合、3か年の成果は順調に推移していますが、課題は先ほども述べましたが、やはり各過程での取組の理解、浸透です。加えて安心・安全な農産物を用いた加工品の生産とその販路拡大、ひいては新発田市における農産物のブランド化、

これらに力点を置いて進めていく必要があると考えています。いずれも道半ばであり、課題解決に向けて、今後も市民、事業者、市が協力して取り組む必要があります。

<資料1(頁6)>

行政がまちづくりを進めていくうえでは、行政評価という手法を活用しており、的確に進捗状況を図るため成果を数値化し、それぞれ「産業の発展」、「健康及び生きがいの増進」など、5つの柱ごとに計40の成果指標値を把握しています。3か年の推移として、概ね順調に推移しています。

以上、庁内において取りまとめた結果を報告しました。委員各位のお力添えをいただきたく、その前提として現在の状況を共有したいという思いから、報告をしました。

【委員長】

ありがとうございました。これらの成果は非常に目に見えづらいものと思う。本当に成果が出ているのかどうかは、このように数値で表されると、継続は力なりのとおり、着々と成果があがっていることがわかる。何か質問等ありますか。

【A 委員】

学校給食は現在16校あるが、停滞しており、昨年後3校増える予定だったが市で予算が無いせいか流れてしまった。今後更なる推進をお願いしたい。

食の循環によるまちづくり推進計画に前市長が掲載されているのは、市外の方に見られたら恥ずかしいのではないかと。

【事務局】

ありがとうございます。検討を進めていきます。

学校給食のサイクル推進事業では引き続き食育推進課が各学校に働きかけをしています。受け手のことや市の予算のこともあるので、実施できるところからということで進めています。

推進計画の冊子については、本日、各取組を計画立ててやっていることをお伝えするために配布しましたが、計画期間の平成21年度から27年度の折り返しを迎え、市長も交代しているのが現状です。3か年の推移も踏まえながら、目標値等の見直しの必要もあるので、検討が整い次第、新たな形にしていきたいと考えています。

【B 委員】

東新町で生ごみ分別をしている。その実施開始はNPO法人ユー&ミーの会の皆様が、新発田市の政策として取組が始まる前から、一軒一軒説明に回っておられた実績もあり、その積み重ねの結果でもあると思う。「やって良かった」という声が出ており、私は前市長がこの取組を前面に打ち出したという印象だが、市長が交代し、生ごみ分別の推進は弱まっ

てきているという印象を受けている。私の町内では、推進地区になったはいいがこれが今後どう広がっていくのかというその見通しが立っていない。新発田市の限られた予算ではこれが限界なのか、というのが正直な気持ち。この推進地区が11になった今、予算が頭打ちで、今の形のなかでどう進めていくのかを示してくれないと、見通しがはっきりしないので、環境衛生課だけでなく食の循環全体のなかの問題として明らかにしてほしい。

実際に、市側の要望として「ごみ収集はお金がかかるから、これまでのごみ収集の3回を改め2回にしたい」とする一方で、町内の意見として「なぜ生ごみ分別の推進をしていない家庭までが、推進地区内にあるというだけでごみ出しの日が3回から2回になるのか」という疑問が、私の町内で問題になっている。「それならいっそのこと生ごみ回収をやめてください」という声も出ている。生ごみ回収はやって良かったとする一方で、町内の問題にもなっていることを分かってほしい。

【C 委員】

事業を推進していくうえでの問題点ですが、当然、市民の皆様の理解と協力が必要であり、町内でそういったご意見があることも耳にしております。そもそも堆肥センターの収容可能量からすれば、市内全域をカバーできるものではなく、また、そうした想定もしていません。家庭生ごみ堆肥化を推進するにあたり、地域内での理解に加え、取組地区とそうでない地区との公平性を保つことが課題ですが、今後は地域での取組もさることながら、各家庭における取組として生ごみ分別と、生ごみ減少の推進に力点を置き、また、決して食の循環そのものが否定されるものではないので、市民の皆様が自らその意識を持っていただけるよう呼びかけ、周知を続けていきます。

【D 委員】

3年間ほど大使を務めた永島敏行氏は大使ではあるが、なぜ彼が応援団として資料に載っていないのか。

【事務局】

資料は、応援団として無償で活動している方のリストです。永島氏は大使交流イベントで当市に来ていただいて、謝礼を伴いながら活動をしてもらっていたことから区別しています。大使についてはまた後ほどの議事で詳細に説明し、お諮りしたいと思います。

4 議事

(1)平成24年度事業報告及び収支決算について

【委員長】

それでは議事に入りたい。最初に、平成24年度事業報告及び収支決算について事務局

より説明願う。

【事務局】

<資料2 - 1(頁1)>

お手元の事業報告書は、市から推進委員会に委託をし、計画を立てて進めていただいた事業のあらましです。食の循環啓発委託事業という名称で委託し、皆様には主に啓発における活動を受託いただいていた。事業目標は、食の循環によるまちづくりに対する理解を深め、市民、事業者及び市が一体となって取り組む仕組みを作り、ひいては「食の循環のまち新発田」を積極的に市内外に発信するというものです。その目標を実現するために、事業内容として食の循環しばたリレートーク、しばた食の循環大使、しばた食の循環応援団の活用、食の循環しばたモッタイナイ運動の推進及び食の循環のまち新発田のイメージアップという5本立てで事業を展開しました。24年度の報告の要旨をお伝えします。

まず、食の循環しばたリレートークの開催です。当初は年間4回を予定していましたが、4回のうち1回をめざせ100彩健康づくり推進実行委員会の方で、食育推進課が調整をして市立小中学校教育研究協議会で1回。他2回分として本推進委員会に委託して行いました。その2回のうちの1回は10月14日に開催。内容は、しばた食の循環大使である永島敏行氏を招いての講演会でした。テーマは「つなげる」と設定し、全4回に共通するものとしており、演題を「郷土が育む実りを未来に残すために」として実施しました。2部形式で構成し、第2部においては永島敏行氏と推進委員会の皆さんとの対談形式で「食の循環しゃべろて場」を実施しました。聴講者は、約200名。リレートークという位置付けでありつつ、大使交流イベントとしての意味合いを持たせようと、生涯学習センターにおいて市内農産物の販売や市民との交流ということで、しばもん市、まちカフェりんくなど、推進委員会の皆様にも参画してもらいながら、農産物のPRなどを行いました。その他、食生活改善推進委員会の皆様のご指導のもと、笹団子作り体験コーナーに参加者21名の親子が揃って、郷土料理にふれる取組も行いました。新発田ガス株式会社が取り組むエコクッキングで料理に関するパネルを展示、商工会議所青年部からは雑煮合戦の取組をまとめたパネル展示をしていただきました。

3月15日には第28回として佐藤初女氏をお招きしてリレートークを開催する準備をしていましたが、講師の体調不良により、急きょ中止となりました。他2回は委託外なので参考として記述しておりますが、第25回は食育推進課の調整のもと、中村文昭氏をお招きして「食とみどりの新発田っ子」とし、市民文化会館で講演会を開催。

10月27日にはフードスタイリストのマロン氏をお招きして、「食卓をとおして子どもたちに伝えたいこと」と題して健康づくりフェスティバルとの合催で講演及び実演を行いました。

続いて、しばた食の循環大使の活用です。リレートークのひとつに組み入れつつ市民との交流も含める形での同時開催として10月14日に開催しました。また永島大使に新発

田産農産物のアスパラガスやル・レクチェを贈呈し、「非常においしい」といったコメントを頂戴し、それを用いて、著名人のお墨付きとしてホームページ等で紹介しています。

<資料2 - 1(頁2)>

次に、しばた食の循環応援団の活用ですが、現在14名の方に応援団として活動していただいています。24年度は、健康推進課が調整を図りめざせ100彩健康づくり推進実行委員会が開催した第27回リレートークの講師であったマロン氏が、当市の取組に賛同していただき、応援団に加入しました。もう1名、学識者という位置付けで田中延子氏。前文部科学省学校給食調査官であったこともあり、当市の食育の取組を、学校給食を活用した食育の先進事例と評価され、当市の食育に関心をお寄せいただき、応援団に加入していただきました。応援団においては年1回程度、新発田産農産物をお送りして、「著名な方から高い評価をいただきました」と、いただいたコメントをもって農産物のPRをしています。昨年度はル・レクチェを送って、寄せられたコメントがあるので、今後ホームページで紹介する予定でいます。

次に食の循環しばたモットイナイ運動の推進ですが、取組を開始した平成22年度に70店舗の加入があり、23年度に30店舗が新たに加入し、24年度にも3店舗が加わりました。計102店舗が現在の協力店舗数です。各飲食店に掲示するタペストリーなどのデザインは推進委員会で話し合っ作成し配布をしましたが、飲食店の場所がどこにあるのかを周知する必要があると判断し、昨年6月15日の広報紙の配布に合わせ、環境衛生課において取組内容の紹介をふまえた協力店マップをとして全戸配布をしました。今後もモットイナイを合言葉に、家庭、幼稚園、保育園、小中学校、モットイナイ運動協力店の協力を仰ぎながら、少しでも食べ残しを減らす取組を継続していけるように、その推進策を継続して検討しているところです。昨年度も川柳や標語の募集で呼びかけをしたらどうかという検討をしていましたが、今後も検討を続けていく予定です。

最後に、「食の循環のまち新発田」のイメージアップとして取り組んだことが7つあります。まず、市ホームページを通じて「食の循環のまち新発田」の“今”を随時情報発信しています。下條委員長が経営するそうえん農場が経済産業省から賞を受賞、NPO法人ユー&ミーの会も県から賞を受賞されたりなど、そういったトピックをホームページを通じて発信しました。他にも、広報しばたにて当市食の循環イメージキャラクターのめぐるを用いた周知・普及をしたり、新発田商業高校が主催する「キッズビジネスタウンしばた」といった小学生が職業体験をする催しの際の景品として当市食の循環イメージキャラクターのめぐるがプリントされたコットンバッグを作成し配布しました。また、平成19年度から24年度までの取組をまとめたリレートークパンフレットを作成。食の循環のまち新発田を紹介するパンフレットなど、各種パンフレットを作成しました。

<資料2 - 2>

次に、これらの経費についてお話しします。まず、収入は市からの委託料277万8千円。支出はそれぞれの項目ごとに予算と決算額を記していますが、決算額の内訳として食の循

環しばたリレートーク事業が62万4749円。その内訳として、ポスター、チラシにかかる経費が約9万円、リレートークのパンフレット作製に22万6800円ということで執行しています。しばた食の循環大使事業では、永島大使に当市での講演をしていただくということで80万円。その謝礼は、お付きの方と永島大使2人の行き帰りの旅費等すべて込みの額となります。しばた食の循環応援団事業は農産物を購入した費用と送付した費用です。食の循環のまち新発田イメージアップ事業は、新発田商業高校が開催する事業において「コットンバッグ作成にかかる経費を補助してほしい」という申し出を受け、推進委員会での承認もあり6万4840円の執行。その他、紹介パンフレット作成も行いました。推進委員会の運営ではイベント開催当日での使用品にカラー印刷が必要だったものがあり、必要備品としてカラープリンターを購入しております。以上、決算報告です。

【委員長】

既に監事による監査も済んでいるとのことですので、監事より報告願います。

【E委員】

監査報告。食の循環啓発事業の受託にかかる平成24年度会計について監査したところ、収入・支出ともに適正であり、正確に処理されていたことを確認しました。

【委員長】

質問等ありますか。

では私の方から。リレートーク事業で予算の半分しか使われなかったのは、佐藤初女氏の講演が中止になり、佐藤氏に謝礼が支払われなかったことが原因か。

【事務局】

ご本人からの申し出もあり、講演会をしていないため謝礼はお支払いしていないので、その分の減額です。しかし、佐藤初女氏は青森から当市に来られるのに新幹線を利用するために相応の旅費がかかっています。その交通費等はお支払いしたので、この額になりました。

【委員長】

他にないようでしたら、事業報告及び収支決算についてご承認いただけるか。

【一同】

(承認)

(2)平成25年度事業計画及び予算案について

【委員長】

それでは平成25年度事業計画及び予算案について事務局から説明願う。

【事務局】

<資料3 - 1>

24年度の事業報告と同様、事業目標はブレることなく今後も食の循環によるまちづくりの理解促進であり、市民、事業者及び市が一体となって取り組む仕組みをつくり、食の循環のまち新発田を積極的に情報発信していくことです。事業内容については5つあります。まずは今年度も食の循環しばたリレートークの開催。8月21日に教育委員会の主催で立木早絵氏をお招きしての講演を予定しています。立木氏は目が不自由であり、24時間テレビで津軽海峡を泳いでいましたが、そのエネルギーがどのように培われたか、という流れから食についても講演をしていただく予定だと聞いています。11月16日には生涯学習センターにて、市とめざせ100彩健康づくり推進実行委員会の主催で、医師の白澤卓二氏をお招きして講演会を実施する予定です。本推進委員会では、これら2回をふまえて残る1回分を主催する予定です。具体的に誰を講師にするか等は、皆様からご意見をいただきながら決定します。この事業計画の詳細を決定するにあたっては、その検討体制を小委員会形式とすることを基本とし、それで良しとなればその中でまた詰めていくこととお諮りします。

次に、しばた食の循環大使の活用ですが、平成22年度から「しばた食の循環大使」としてご支援いただいた俳優の永島敏行氏を通じて「食の循環のまち新発田」の魅力ある情報を発信してまいりました。毎年度、来市いただき交流を深めていましたが、情報発信力不足は否めず、また永島大使が主催する青空市場が東京で行われており、そこを販路の一つと捉え永島大使を活用したかったもののなかなか実を結ばず、今後も成果が見込めないことから今年度中に大使交代を検討しています。また、大使制度そのものの在り方を含め皆様と一緒に検討していきたいということです。

しばた食の循環応援団の活用は現在14名で、今年度もリレートークをきっかけとして応援団を増やしていきたいと考えています。応援団の方には新発田産農産物へのコメントをいただき、あらゆる機会を通じて新発田を宣伝していただく予定です。

食の循環しばたモットイナイ運動の推進は、先程の24年度事業報告でもお話したとおり、川柳、標語募集を含め今年度も引き続き検討していく予定です。また、平成25年度消費者行政活性化(食品ロス削減)交付金は、食の循環によるまちづくりそのものが食べ物への感謝の心、モットイナイ意識が醸成され、食品ロス削減に結び付くということで消費者庁に申請をし、先日、採択を受けることができました。そのことをふまえて食の循環しばたモットイナイ運動を皆様と手を携えながら市をあげて更に推進する予定です。

「食の循環のまち新発田」のイメージアップについては3点です。食の循環ロゴマーク、

併せて食の循環イメージキャラクターめぐるもあらゆる場面で活用して、食の循環をPRしていきます。また、今年度の新たな試みとして食関連イベントカレンダーの作成、配布を予定しています。イベントの日程がバッティングしている、会場が離れている、等の声をよく耳にします。あえて同日、別会場で開催し、回遊性を持たせるのもねらいとしていますし、逆に市民からすれば日程が重なっており、どちらか1つにしか参加できないということもあったので、それらをふまえ、市が主催する食関連イベントについて庁内で調整をしたものを見える形にしたいと考えています。カレンダー作成を軸としながら、デザインや大きさをどのように作成するか等、これについても皆様のお力添えをいただきながら検討していきます。カレンダーを見ると、市民の方々は年間を通じて「食の循環に関連するイベントがこんなにあるのか」「この日はこのイベントに行こう」といった風に関心を寄せてもらえる面もあると思いますので、この取組を進めていきたいと考えています。

以上、これらは事業計画案の大枠で、詳細についてはまた改めて会議で詰めていきます。委員は総勢38名で、お忙しい中、全員が集まって会議をするのは難しいので、必要に応じて小委員会を開催して詳細を詰めていきたいと思っています。推進委員会を立ち上げて3年が経過しましたが、これまで小委員会という形式をとってきました。昨年度からの2年間を1クールとして今皆様にお集まりいただいておりますが、昨年度も14名で小委員会を組織しており、25年度においても同じく14名で小委員会を組織して、検討を深めていきたいと考えていますので承認をお願いします。

<資料3-2>

予算書(案)ですが、今年度の委託料として288万9千円。昨年度と比較して11万1千円の増であり、この予算を用いて、先程の事業計画を展開していくこととなります。

支出について、食の循環によるまちづくりしばたリレートーク事業の予算額が134万円。内訳として講師謝礼が75万5千円。ポスター・チラシ等印刷にかかる費用が38万円強で、その他消耗品等の費用となります。

しばた食の循環大使事業として117万4千円を予定。主な内訳は大使謝礼として85万5千円を予定しています。しかしこの部分については見直しが必要ですので、どの方を大使にするのかによって金額が変わってきます。

しばた食の循環応援団事業は、農産物を購入して、それを送付する費用です。また新たな応援団の加入にあたる調整として事務局の旅費等を含め14万円を予定しています。

食の循環イメージアップ事業は、食関連イベントカレンダーを作成するのにあたり、22万3千円を予定しています。

その他、推進委員会の運営として、会議開催に係る通信運搬費等として1万2千円を予定しています。

以上の合計で288万9千円となります。

【委員長】

何か質問等ありますか。

【F 委員】

食の循環大使のことで、永島氏の講演を聞いたが、新発田市が食の循環の取組を行っていることさえ知らずに講演をしていたので、もし大使を選ぶのなら、本当に新発田の食の循環のことを分かっていただけの方、お話しただけの方を選んでほしい。今年、講師を選ぶ際には、80万円の税金を無駄にしないように、新発田の食の循環を理解し、私たちに伝えてくれる講師選びをしてほしい。

【事務局】

皆さんと一緒に、どのような人がいいのか話し合っていきたいと考えています。今ご指摘いただいたこともふまえ、この度、見直しに踏み込むこととして計画案をお示ししています。定例会においても、市長答弁で「私も永島氏のブログを見たが、新発田について全く言及されていない」と答弁していましたので、求めるものは何か、今後どういった形で活用していくのか、皆様の意見を聞きながら、考えていきたいと思えます。

【委員長】

大使については見直しを行うということでよろしいか。

【一同】

(承認)

【委員長】

私から1つ。新発田産農産物の販路拡大PRについては政策大綱にも記入されている。おそらく永島氏は青空市場を主催しているということもあり、販路拡大のねらいもあったと記憶している。計画案には「生産者サイドの都合等により」という記載もあるが、具体的に取組の中で、どういった問題があったのか。

【事務局】

昨年10月14日にリレートークを開催する前の打ち合わせ時にも、市から永島大使に「青空市場への参加に対し、大使として当市に協力していただきたい」「食の循環のことをもっと分かってもらいたい」とその都度伝えてきました。永島氏からは「ぜひ活用してください」とのお話でしたが、実際には生産者側の参加希望は年々減少。青空市場は東京駅地下などで商売をしており、生産者自ら販売をすることをポリシーとしています。当市の生産者が自前で旅費、運送費を支払って東京で商売をすることは、「利益を考えると生産者にとっては余りうまみを感じない」という声があるのも事実です。永島氏に大使を依頼し

た目的は2つあり、1つは情報発信。もう1つは、永島氏だからこそ関東方面での販路としての場の提供という側面も期待できるというねらいもありましたが、それらについては今後成果が見込めないと判断し、この度の大使の見直しに至りました。

【委員長】

食関連イベントカレンダーについて、様々な団体が主催する各種イベントあるが、それを一つの見やすいカレンダーにまとめるということ。仮にイベントの日程がバッティングしていた場合の調整は図るのか。

【事務局】

主眼は見える形にするということです。市主催イベントを中心として、事務局で取りまとめ、一覧表にして関係各課等にフィードバックをすることで情報の共有ができ、日程をずらしたり、あえて重ねたりして回遊性を持たせるなどの調整が可能となります。カレンダーとして形にすることと、日程調整をすることは対を成していると考えています。

【G 委員】

本日の議論を聞いて、やはり大使の必要性そのものを検討する必要があると思う。

【委員長】

では、大使制度については小委員会で検討することとしてよろしいか。

【一同】

(異論なし)

【委員長】

他にご意見等ありますか。

【H 委員】

食関連イベントカレンダーはいつ頃完成予定か。

【事務局】

市主催イベントを中心にしたものは近く取りまとめる予定です。今年度の下半期開催分に照準を合わせ作成を予定しています。事務局としては、皆様にはそのデザイン等についてご意見いただくことを考えています。何より今年度はそうした仕組み・足がかりをつくる年だと考えており、今年度の下半期開催分のイベントカレンダーを作成する段取りが一度仕組みとして構築できれば、下半期期間中に来年度の予定を押さえ、という風に定例的

に運用が可能となります。しかし、現実的に年度末に翌年度1年間分のイベントカレンダーを作るというのは、日程が近くなると決まらないということもありますので、上半期と下半期であるとか、または春夏秋冬で分けるという方法も考えられます。今ほどのご質問に対する回答としては、今年度分としては、9月をめどに今年度の下半期開催分のカレンダーを仕上げる予定です。

【I 委員】

モットイナイ運動が市民に広がっていないと思う。市民の方々が何も感じていない。小学1年生に新発田市の堆肥を使ってさつまいもを植えてもらったが、子供たちには言葉ではなく絵で説明をすると分かってもらえると感じた。また、植えて終わりではなく、苗がどのように成長して、収穫ができるまでを教える。また保育園ではゴーヤのグリーンカーテンを実施しているが、そこに保護者の方、市民団体や行政が集まって一緒に新発田市の堆肥を使う際、給食の食べ残しが堆肥になったということ子どもたちに教えている。食の循環の取組は、大使やリレートークだけでなく、もっと市民に密着したものを実施してほしい。大人に教えるより、幼稚園、保育園、小・中学校で教えた方が効果がある。

【事務局】

参考になるアドバイスをいただきました。食の循環の各過程を体験してはじめて食の大切さが分かるということもありますので、各事業の連携を図っていきたいですし、委員の皆様がそれぞれの活動の場で実践している取組を共有し、お互いに協力して活動をするなど、委員同士の繋がりが生み出されることもあると思いますので、今後も共有をしながら進めていきたいと考えています。

皆さんの活動をホームページを通じて紹介していますが、各団体のホームページと、食の循環によるまちづくり公式サイトをリンクし、双方にとって有益となるようにしていきたいと考えています。皆様が運営するサイトがあれば、食の循環によるまちづくり公式サイトとの相互リンクをお願いします。

【委員長】

佐藤委員が言いたいのは、大使やリレートークだけでなく、食の循環を市民に根付かせるような展開をしていくべきだということだと思う。それがこの3年間、リレートークなどに忙殺されて本当に大切なことが置き去りにされた印象を私も持っている。もう一度原点に立ち返った方が良いと思う。

【J 委員】

新発田の子どもたちは、新発田市でどのような野菜が栽培されているのかさえも知らない。市外で栽培された野菜では食の循環にならない。新発田市にはこんなおいしいもの

があるということを知って、食べていただくことが食の循環には必要だと思う。地元の野菜があまり浸透していないので、より地元に向けて取組を進めていってくれば、農家としてもやりがいがあるし、何より子どもたちに分かってもらえるし、分かってもらいたいと思う。

【事務局】

大使制度を含め、頂戴したお話を参考に、事業計画の詳細を詰めていきます。今年度のスタートにあたり、原点に立ち返って小委員会の中で検討をしたいと考えています。今年度から食の循環によるまちづくりを市全体の取組として位置付け直し、新たなスタートを切ることで再構築をしました。学校給食での地場産農産物の使用率がまだ4割程度ですので、子どもたちの目にも見える形の取組とするにはどうすれば良いかを考えていきたいと思っています。

5 その他

【委員長】

それでは、事業計画と予算の詳細については、昨年度に引き続き小委員会で議論します。

その他、事務局の方から何かありますか。

【事務局】

現在、食の循環によるまちづくり公式サイトにおいてめぐるリンク(相互リンク)の募集を行っています。先程も少しお話ししましたが、皆様の活動を公式サイトを通じて紹介したいと考えています。併せて皆様の運営しているウェブサイトでも、食の循環によるまちづくり公式サイトの宣伝をしていただきたい。この件については、改めて文書で通知予定ですが、検討をお願いします。

最後に、2年任期を基本としておりますが、改めて任期の折り返し後の1年間ご協力いただきたく、小委員会のメンバーをご紹介します。広岡委員、三田村委員、阿部委員、藤田委員、木戸委員、佐藤副委員長、金田委員、宮尾委員、宮島委員、高橋委員、川本委員、津村委員、下條委員長、関根委員の計14名。この14名で小委員会を組織し、事業内容の詳細について検討を深めていきます。

【委員長】

昨年から引き続きですが、小委員会の皆様よろしくをお願いします。

次回の会議予定は定まっているか。

【事務局】

改めて文書でも通知しますが、小委員会の開催予定は7月上旬を考えています。

【委員長】

他に質問等ありますか。

無いようなので、以上で平成25年度第1回新発田市食の循環によるまちづくり推進委員会を終了します。

6 閉会